

# 生文研メール

## 14号

平成23年1月13日  
 Ver. 1.1.0  
 生活文化研究所  
 〒700-8516  
 岡山市北区伊福町  
 2-16-9  
 ナトリウム清心女子大学  
 e-mail  
 ricch@post.ndsu.ac.jp

### 目次

|                           |      |   |
|---------------------------|------|---|
| 日本人と海藻のかかわり (14)          | 今田節子 | 1 |
| 海藻の食文化の特徴とその背景            | 新田義之 | 3 |
| 体験的生活文化史 昭和編 その十四         | 広嶋進  | 5 |
| 村上春樹と日本の古典<br>西鶴研究「ほれ話」14 | 横山 學 | 7 |
| 不思議な出会い その十四<br>個人文庫のゆくえ  | 横山 學 | 8 |
| お知らせ                      |      |   |

## 日本人と海藻のかかわり (14)

### 海藻の食文化の特徴とその背景

今田節子

これまで我が国で利用されてきた代表的な海藻を取り上げ、その歴史や食習慣について述べてきた。それらの内容を見渡してみると、我が国独自

の伝統的な海藻の食文化の特徴が見えてくる【表1】。そして、それらの特徴を生み出してきた様々な背景に思いを巡らすことができる【表2】。海藻の食文化の特徴を整理してみると、まず第一に、日本人と海藻の関わりは古く、その種類や用途は実に幅広いものであったことをあげることができる。各地域で食用されてきた海藻は五十数種類におよび、日本は世界に稀な海藻食用国であったといっても過言ではない。古代には税として朝廷に貢納された海藻は貴族階層の食材料として、神社仏閣の行事の供物として、神官や僧侶の供養料としても使われ、海藻の流通は市や座の発達にもつながっていった。これらの習慣は後に民間の食習慣にも影響を及ぼし、日常の食材料としてだけでなく、昆布や海苔、トコロテンやイギスなどにみられたように祝事や仏事の供物や料理に使う習慣に結びついて行った。そして、海藻は天日乾燥することで長期間保存できることから、ヒジキやエゴノリのように凶作時の、また戦争中の救荒食としても蓄えられ、人々の命をつなぐ役割も果たしてきた。さらに長年の経験から薬効や健康増

進の効用をもつことを会得し、実生活に活かしてきた。時には贈答品や米や魚介類を入手するために物々交換の対象ともなった。時代と共に海藻の種類や性質が明らかになるにつれ、その用途はさらに広がり、食用以外の建築用の糊、田畑の肥料、化学成分の原料などとしても大きな役割を果たしてきたのである。これらの幅広い多彩な海藻利用は、日本人と海藻のかかわりがいかに古く、そして深いものかを物語っている。

第二に、世界に誇ることができるといえる海藻の食文化の特徴として、海藻全体を生食または加熱調理して食べる習慣をあげることができる。汁物、酢の物、和え物、煮物、炒り物、揚げ物、飯や餅料理、漬け物など調理法が多彩で、野菜料理と酷似している。この特徴は、他の国の海藻利用と比較してみるとさらに明確である。例えば東南アジアの国々でも海藻をスープやサラダ、煮物、ゼリーに使う習慣がみられるが、海藻の種類や調理法は限られたものである。そして、その他の国々では、海藻からアルギン酸やカラギーナン、ヨウ素などの化学成分を工業的に抽出して利用するのが普通のものである。近年、食用海藻を Sea Vegetable と表現することが多くなった。日本の海藻の食文化はまさしく「海の野菜」の食文化と言い換えることができるものである。

そして第三の特徴として、永年の経験から会得した生活の知恵を活用した海藻の加工保存法や

調理法をあげることができよう。例えば海藻組織の軟化、味や香りの向上、色や食感の改善、原藻の溶解やゲル化の促進などである。日光や風、海水や淡水などの自然環境を活かした海藻の漂白や乾燥保存、家庭で使用される熱源や鉄製の生活器具を利用したヒジキやアラメのあく抜き、そして庭先で実る柑橘類や果実、半農半漁の生業形態のなかで栽培される米や大豆、稲わらなどの農作物を活用したワカメの灰干しやイギスの溶解・ゲル化、塩や味噌などの日常的な調味料と組合わせた塩蔵ワカメや海藻の漬物など、数えあげるときりが無い。これらの加工保存や調理に用いられる技術は、海藻のために特別に開発されたものではなく永年の生活体験から得たものばかりで、現在では科学的な裏付けをもつ技術も少なくない。

このような特徴をもつ我が国の海藻の食文化はどのような背景の基で形作られてきたのであろうか。海藻の生態と海環境などの自然環境との関わり、各地域の気候風土の中で培われてきた生業形態との関わり、永年繰り返されてきた生活体験や人々の交流、物資の流通などの影響、古代から行われてきた海藻利用の歴史的要因の関与などが考えられる。

褐藻類は寒海域に、紅藻類は温海域に、緑藻類は暖海域に自生が適するという生態的特徴を持つ。日本は海に囲まれ南北に長い海岸線を持ち、暖流と寒流の両海流の影響を受ける海環境は多種類

の海藻の自生に好条件である。そして、海士民族といわれるように原始の時代以来、日本人と海とのかかわりは古く、各地域で発達していった漁業専業、漁業偏重型の半農半漁、農業偏重型の半農半漁などの生業形態のなかで、採取目的は異なるものの海藻採取は年中行事のように毎年行われ、乾燥保存されてきた。古代にはその環境をうまく政策に取り入れ海藻を税の一部とした。また、豊富な海藻を漁業形態や加工業に組み入れ経済生活の一助としてきた地域も多い。そして、海藻は乾燥保存が可能で、運搬しやすいため全国に流通していき、自給自足の採取が可能な地域のみならず、農山村での利用を可能にしてきた。漁村だけでなく半農半漁村、近隣の農村地帯においても田畑の肥料用海藻の採取などで海との関わりは深く、その永年の経験を積むなかで海藻の性質を知り、情報を交換しながら、よりよい加工保存法やおいしく食べるための多彩な料理法が工夫されてきた。さらに古代の上層階層にみられた海藻を神社仏閣の行事に使う習慣は、後に庶民階層の行事食に影響を与え、各地域、各時代の宗教観や価値観などを反映しながら精神的意義の高い行事食の習慣を形成してきたといえよう。

このように日本の自然環境や海藻の性質に、社会環境が複雑に絡み合い、多彩な我が国独自の海藻にまつわる食文化を形成してきたといえるのである。なかでも加工保存法や調理法、海藻にまつ

わる神事・磯行事にみられたように、我が国の海藻の食文化は漁業規模や稲作・畑作農業など、生業とのかかわりが想像以上に深いものであったことを聴き取り調査過程で随所に感じ、興味を持つてきた。そこで、次号(『生文研メール』15号)では、生業とのかかわりに視点をあて海藻の食文化の背景をさらに明確にし、「日本人と海藻のかかわり」を締めくくりたいと考えている。

#### 【表1】日本における海藻の食文化の特徴

・多彩な加工保存法：素干し、すき干し(ノリ)、蒸し煮干し(ヒジキ・アラメのあく抜き)、水晒し干し(テングサ・イギスの漂白)、塩蔵(ワカメ)、漬け物など。

・藻体全体を食用とする多彩な料理法：野菜料理と酷似(Sea Vegetable)としての利用。

・使用目的が多彩：日常食、行事食、救荒食、贈答品、農作物との物々交換、肥料などの農業資材、建築糊、洗濯糊、洗髪剤など。

・効用を持つ食べ物(料理)としての海藻利用：高血圧にネコンブ・メカブ、中風にヒジキ、虫下しにカイニンソウ、冷え腹にイギス、下痢や腹痛にシラモ、高血圧にテングサなど。

・海藻にまつわる神事・磯行事・村行事の伝承：海藻の豊漁祈願と感謝祭(荒海神事、若布刈神事、ノリ採り神事)、解禁の日の磯行事(磯の口開け、磯遊び、磯相撲、浜祭りなど)。

#### 【表2】日本における海藻の食文化の背景

・海藻の自生・採取に適する自然環境を有する：海藻の生態と海の環境（褐藻類：寒海域、紅藻類：温海域、緑藻類・亜暖海域）、海藻の自生に適した海岸（紅藻類・緑藻類・干潟、褐藻類・漸深帯）道具を必要としない磯採取・打ち上げ採取が可能。

・身近なものを利用した加工保存と料理の工夫：自然環境の利用（日光・風・海水・淡水・雨・夜露）、稲作・畑作の反映（稲藁の灰、米糠、大豆野菜の利用）、果樹栽培の関与（柑橘類の果汁・梅干しの利用）、調味料・調理器具の利用（塩・味噌・食酢、鉄釜）、紙漉技術の応用（板海苔の加工）。

・保存性が大きく、農山漁村を問わず流通：海藻の採取・加工・保存・料理の一連の習慣が定着し、日常の食卓へ、年中行事・通過儀礼・農耕儀礼の縁起物、仏事の精進材料として保存。

・歴史的影響：古代より海士族による海藻採取が行われ、採取の技法、海藻の知識が伝わる、古代より儀礼食として利用、民間へ普及、江戸時代の「本草書」の内容と民間伝承にみる海藻の効用と酷似。

・生業との関わりが大きい：大規模漁業の中での海藻採取の位置づけ低い、中・小規模漁業の漁種に海藻採取は組み込まれ採取・出荷・利用、半農半漁村のおかず採り漁業の中で海藻採取・利用は盛ん。

・海藻の食文化の基層に稲作・畑作文化の存在：海藻の加工、料理法に農作物の利用が多い、海藻の神事・磯行事は農耕儀礼との共通性が大きい、（豊漁祈願・安全祈願、漁家と農家の交流・親睦の場、海藻採取を円滑に行う知恵）。

### 体験的生活文化史 昭和編 その十四

新田義之

スエズ運河はどなたもご承知の通り、紅海の北端の都市スエズ（エジプト領）から地中海に面する都市ポートサイドまでの間に掘削された人工運河である。途中にある五つの湖を貫いて、全長一六二・五キロメートル、幅は一六〇〜二〇〇メートル、深さ一四・五メートルというのが現況であるが、これは一九八〇年に完成した大拡増深工事後の数値だから、私たちが通った頃はもつと幅が狭くて底も浅かったに違いない。とは言っても一八五九年にフランスの外交官レセップスによって工事が開始されてから十年がかりでようやく開通したこの大工事の意義は極めて大きく、東洋の諸国と地中海沿岸諸国とを結ぶ海路が喜望峰を迂回する必要がなくなったおかげで、殆んど半分に近いほど短縮されたのである。最初フランスとエジプト両国の出資で出発したスエズ海洋運河会社は、後にエジプトの持ち株をイギリスが買い取り、さらに一八八二年に武力占領してイギリスの軍事基地にしてしまった。それ以来この運河は、イギ

リスのアジア植民地政策を担う重要な拠点の一つとなったのだが、一九五六年のいわゆるスエズ動乱の後に、エジプトのナセル大統領によってスエズ運河国有化が宣言され、スエズ運河公社の管理するところとなっている。私たちが通過したのは一九五九年九月であるからこの事件の三年後で、ちょうどその頃は、平穩そのものといった感じであった。しかしその後第三次中東戦争の影響で、一九六七年から一時封鎖されており、封鎖が解かれたのは一九七五年だったという。政治・経済的に重要な地点は、常に大国間の利権争いに晒される運命を負っているであろう。

ご承知のごとくこの運河の西岸はカイロに近くエジプト領でも最も近代化の進んだ部分であり、右岸はシナイ半島の最北西部であって、イスラエルとパレスチナの間紛争地帯に近接し、第三次中東戦争後は一九八二年までイスラエルが占領していた場所である。スエズ運河通過中に撮った【写真1】は、進行方向右岸つまりシナイ半島側で、見渡す限りの砂漠に何か作業をしている労働者らしい人影がぼつぼつと見えるだけであるのに対し、【写真2】は左岸、つまりカイロ側で、瀟洒な建物や文化的施設などが立ち並んでおり、その対照が大変印象的であった。

私たちを乗せた船は九月十八日に運河の終点であるポートサイドから地中海に出て、カイロにもどこにも寄らずに、一路目的のマルセイユに向か

ってひた走った。そのうちに夜になり、ベッドに入ろうかと思っている頃に「ただいまヴェスヴィオの火が見えます」というアナウンスが聞こえ、飛び出していってみると右手に遠く、たしかに火山の噴煙が望まれた。エトナの火も拝めたはずなのに、うっかりしているうちシチリア島を通過するのに気付かなかったのは、顧みれば残念なこと



【写真1】「スエズ運河通過中：右岸」

であった。

一夜明ければ九月十九日の朝、ラオス号は無事にマルセイユに到着した。横浜を出航してちょうど一ヶ月かけての長旅であった。下船する支度をしていると顔見知りのフランス人船員がやってきて、「自分はあなたたちより下船が遅くなるので、この荷物を俺の妹のやつている海鮮レストランに



【写真2】「スエズ運河通過中：左岸」

届けておいてくれないか、しばらくしたら自分もそこに行き、一緒に食事をしよう」と頼まれた。私たちは「自分の荷物で一杯だから」といって断ったが、気前よく引き受けていたら密輸の片棒を担いだ容疑で逮捕されるところであった。後にこのことが判明して冷や汗をかいたが、それやこれやのつまらない出来事は省略する。【写真3】は



【写真3】「食事を共にした日本人留学生諸氏」

お別れの食事を共にした日本人留学生諸氏を撮った記念写真だが、後に日本に帰ってから皆それぞれの専門分野で大いに活躍した面々である。

マルセーユで時間がくるまで映画を見て過ごし、ドイツ学術交換協会から届けられていた乗車券で仲間のエアハルト奨学生二人と共に汽車に乗ったが、エアランゲンに行く彼らとも途中で別れた。

そして私たち二人はフランクフルトで一泊して疲れを休めたほかは、どこにも立ち寄らずにまっしぐらに留学先のハンブルクへと急いだ。車中であつたよつとした異文化体験をしたが、これは次号の『生活文化研究所年報』（第二十四輯）に書く雑文でも触れるつもりなので、ここでは省略する。

ハンブルクに到着すると、ホームには東京銀行ハンブルク支店の大隈氏が待っていて下さった。大隈氏がかつて第二高等学校で菊池栄一教授の教えを受けた関係で、当時私の大学院での指導教官であつた菊池先生から私たちの世話を依頼されておられたのである。大隈氏はすでに、静かな通りにある適当なパンシオンに私たちのために部屋を予約してあり、そこに車で連れて行って下さったが、更にその晩は大隈邸で、夫人が日本食の用意をして待つておられた。久しぶりのしみじみとした日本の味に、本当に涙の出る思いがしたことは今でも忘れられない。

それからというもの大隈さんご夫妻には、日常生活の万端についてお世話になることになるのだ

が、その晩はまず、ドイツで生活する上で必要となる生活上交際のマナーや、在留日本人との関係の持ち方などを、こまごまと親切丁寧に教えて頂いた。菊池先生から預かったこの若い後輩が、人前で日本人の恥となるようなことをしないようにと、どんなにか心配をされたのであろう。しかし国内にいると殆ど感じることはない「母国の恥」という観念が、この時に私たちの心の内ではつきり意識化されたように思う。

翌日は電車で、日本で教えを受けた恩師で日本学者のギュンター・ヴェンク先生を、ご自宅にお訪ねした。しかし奥さまの言われるには、先生はお嬢さんを連れて車で出られ、今頃はもう私たちの泊っているパンシオンに着いておられるだろう、ということであつた。すぐに引き返すと、先生とお嬢さんはもう私たちの荷物を車に積みこみ、妻と話しながら私を待つておられた。先生はすでに私たちの下宿を見つけ、契約をしておいて下さつたのである。一泊だけで宿替えしたのはパンシオンのおかみさんに気の毒だったが、大隈さんご夫妻のお心配りといい、ヴェンク先生の深い愛情といい、申し訳ないほどの有難さが身に沁みたまハンブルク生活の門出であつた。

### 村上春樹と日本の古典

#### 西鶴研究ごぼれ話

14

広嶋 進

村上春樹は現代日本の作家のなかで、アメリカ現代文学の影響を最も強く受けた作家として知られている。しかし私には、彼の作品の底流にいくつかの日本文学の古典のエッセンスが流れているように感じられる。このことを彼のデビュー作『風の歌を聴け』（一九七九年刊）を取り上げて、見てみることにしよう。

本作品は「僕」が八年前の夏の出来事を振り返る手記の形式で語られる。「僕」が手記を執筆しているのは一九七八年で、回想されるのは一九七〇年の八月の十八日間の出来事である。大学生の「僕」は東京から故郷に帰り友人や女性と会い、再び東京に戻るといのが、その主なストーリーである。一読すると、登場人物たちの洒落た会話、風俗、飲物、食べ物、引用されるポップ・ミュージック、軽妙な文章など、アメリカ小説を読んでいるような、軽快でさわやかな印象を受ける。また小説の技法として、断片的な章を並置し、手書きの絵を挿入していることは、例えばカート・ヴォネガットの『チャンピオンたちの朝食』などを想起させる（このアメリカ小説は、私の大学四年次（一九七五年）の英語の授業（柳瀬尚紀氏）のテキストだった）。

しかし『風の歌を聴け』はアメリカ小説にはない、ある異様さに満ちている——それは語られる死者の数の多さ、死に関する記述の多さである。

例えば、第一章では八箇所も「死」という言葉が

反復され、四人の死者について言及される。

「彼（ハートフィールド）はその不毛な闘いを続けそして死んだ」「死んだこともたいした話題にはならなかった」「（叔父は）苦しみ抜いて死んだ」「（叔父の）一人は上海の郊外で死んだ」「ケネディー大統領の死んだ年で」「年老いて死を迎えようとした時に一体僕に何が残っているのだろうか」「死んだ祖母はいつもそう言っていた」「祖母が死んだ夜——という具合である（第一章）。

作者は以下の各章で「死」や「死者」について繰り返し話し話題にする。数えてみると、合計で五十一回に及ぶ。本作は文庫本で一五三頁であるから、平均すると三頁に一回は「死」について語っていることになる。この数字は本作を「死」を巡る小説として把握すべきことを示唆する。

その証拠として、本作のタイトル「風の歌を聴け」を挙げる事ができるであろう。作中にはタイトルに呼応する形で「風」が十七回登場する。これらの「風」は、さわやかな「風」と無常の象徴としての「風」の二種がある。

前者の「風」は南から吹いてくる海風である。「海の匂いのする湿っぽい南風が吹き始め」「窓から涼しい風がやつと少しずつ入ってきた」「微かな南風の運んでくる海の香りと焼けたアスファルトの匂いが」とあって、この「風」の多くは快適なものとして描写される。

一方、後者の「風」は、友人「鼠」が語る奈良の古

墳に吹く「風」、ハートフィールドという作家の作品にある火星の「風」、さらに「僕」の恋人の自殺現場に吹く「風」である。引用してみよう。

・「俺は黙って古墳を眺め、水面を渡る風に耳を澄ませた。」「蟬や蛙や蜘蛛や風、みんなが一体になって宇宙を流れていくんだ。」「（鼠）のセリフ」

・「宇宙の創生から死までをね。だから我々（火星）には生もなければ死もない。風だ。」「（火星の井戸）」

・「（二人目の彼女は）みすばらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた。」「

後者の「風」は「死」とセットになって語られている。すなわち、この「風」は生命、宇宙の生成、人間の一生の隠喩としての「風」である。「風の歌を聴け」という題名には「宇宙の歌を聴け」「無常の歌を聴け」という意味もこめられていたのである。村上はあるインタビュー（一九八五年）で、

「風の歌を聴け」というタイトルはカポティーの短編『最後の扉を閉めて』の末尾の一行「何も考えまい。ただ風のことだけを考えてみよう」によったと発言している。しかし、村上がこの一行にタイトルを示唆されたとしても、カポティー作品の方は職場の人間関係に悩んだ男が苦しみの果てに「何も考えないようにしよう」と言っている言

葉であり、話の内容自体も村上作品と相違している。カポティーの短編には、人の死や「あらゆるものは通りすぎる」といった感慨はまったく登場しない。むしろ、『最後の扉を閉めて』と比較すると、『風の歌を聴け』が「死」と「無常」を巡って展開する作品であるという特色が、より鮮明になる。

『風の歌を聴け』は脈絡のない断片的な章群が並び、時間とストーリーが入り組むという複雑な構成になっている。作者はこのような錯綜した章立てを意図的に採用しながら、章と章との間に重大な事件を隠しているようである。

その隠蔽された事件は二つある。一つは、右の（「風」の引用中にあった）首吊りをした「三人目の彼女」が「僕」との間の子供を妊娠したまま自殺したらしいこと。もう一つは、馴染みのバーで知り合った女の子が墮胎し、その相手の男が「僕の友人（鼠）」であることである（斎藤美奈子、田中実、平野芳信、石原千秋の諸論考による）。

『風の歌を聴け』はこのようにその内奥に恋人の自殺と子殺しという、悲惨な話題を隠した小説である。本作の独創は、この古風で陰惨なモチーフをクールで軽やかな文体で語ったことにある。そしてアメリカ小説風の「気分」と、日本的な「無常感」や死者に対する鎮魂とを混在させて語っていることに新しさがある。

このような「無常の風」や「無常感はどこからも

たらされたものなのであるのか？村上春樹はあるエッセイで次のように書いている。

「みんな『風の歌を聴け』を」翻訳小説みたいだねと言ったし、自分でもそう思っていた。……しかし僕の小説を日本的だと言ってくれる人も何人かいて、これは僕には意外だった。「文体自体は翻訳小説調なんだけど、情緒はとも日本のだ」という気がするな」「そうですか」「発想だよ。発想というのはつまり情緒だからね。アメリカ人はああいふ発想はしない。とくに人間同志のコミュニケーションとか、時間の経過とかに関してね」（『八月の庵 僕の「方丈記」体験』『太陽』一九八一年一〇月）

村上は本作に見られる「情緒」「発想」「コミュニケーション」「時間経過」が「日本的だ」と指摘されて驚いている。このことから類推して、『風の歌を聴け』に記されている「無常感」は作者が意識的に記述したのではなく、むしろ自然にあふれ出ってしまったものなのであろう。

村上は言う。「中学校に上がった頃から父親は僕に古典を教え始め、それは高校を出るまでの六年間ずっと続いた。万葉集から西鶴に至るまでの主な作品は全部である。」（同右）

彼は高校の古典の教員であった父親から、日本古典に関し「六年間」に渡り、個人授業を受けていた。村上が高校時代に英語の小説しか読まなかったのは、この父親の特別講義に対する「反発」であ

ったという。

村上の父はまた京都に代々続いた浄土宗の寺の僧侶でもあった。村上の子供時代に毎朝読経する父の後ろ姿を見て育った。そして仏壇に向かう父の周りに、中国戦地での体験による「死の影」を感じた。この「父に潜んでいた死の存在感は父から引き継いだ」数少ないものの一つであり、もっとも大切なものの一つであると語っている（二〇〇九年度エルサレム賞スピーチ）。

本作に底流として流れる「無常感」は、村上の父親から、読経する姿や古典の講釈を通して継承したものであったのである。

## 不思議な出会い その十四

### 個人文庫のゆくえ

横山 學

今日、文献を探すためには<sup>3</sup>を<sup>4</sup>を利用しないわけにはゆきません。居ながらに世界中の図書館につながる事ができ、書物を手しようと思えば各地の古書店の目録を閲覧できるからです。専門外の情報も、思いついた言葉を入力さえすれば、容易く見つけ出すことができます。もともと、情報の質は別のことですが、ついこの間まで、各地の図書館を巡り、一冊ずつ手に取っていたことが夢のようです。

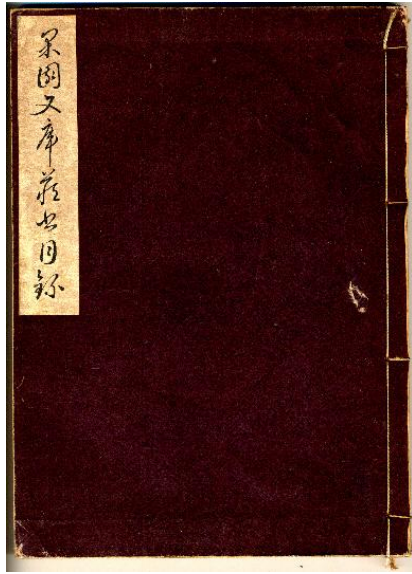
先日『果園文庫蔵書目録』が平成四年に復刻さ

れていることを知りました。この文庫は三越の専務であった小田久太郎の蔵書（『菓園文庫』）で、

古版地誌・西鶴本・仮名草子などから成っています。小田久太郎は、こよなく古書を愛した好書家で、昭和十年十二月に亡くなりました。翌年、文庫は五点の稀覯本で補われました。横山重は整理を委託されて仲間とともに詳しい解題を作成し、これを基に『果園文庫蔵書目録』（限定二百部が十二年春に出来上がり、文庫は売立てに出されました。ちょうどその頃、横山重は一時帰国していた坂西志保と出会い、米国議会図書館が日本図書を集めていることを知りました。帰国後の坂西に書簡を送り、小田文庫の市場での動静を詳しく報告して、一括購入を熱心に勧めています。貴重な文庫が散逸することを心配したのです。日支事変が始まり、物価が上昇して物資も乏しくなりつつある時期で、数々の個人文庫が古書市場に出ていました。果園文庫の一部は、関西の某氏が購入して、京都大学図書館に収められたと聞いています。残りの蔵書は、各地に買われて散りました。

個人が長い時間を費やして集めた蔵書には、その人の世界があります。それを初めて実感したのは、ハワイ大学夏期大学の一室に置かれた宝玲文庫を見たときでした。フランク・ホーレー(Frank Hawley、一九〇六〜一九六一)が生涯を通して集めた「琉球・沖繩」関係書物約二千冊でした。ホーレーには、書物を集める事への執着がありまし

た。重複を厭わず、関心のあるものについては周辺領域を含めて、あらゆるものを集めました。書物の外にも、国絵図や絵巻物、一枚刷りの瓦版から雑誌やパンフレット、玩具に至るまで、それは徹底していました。そして、大切な書物は特注の紺地の本帙で保護され、先の所蔵者の蔵書印の上側に控えめに「宝玲文庫」印が押されておりました。なかには、書物の内部に著者の書入れのあるものや、ペン書きでホーレーの覚書が記されたものもあります。このホーレーの琉球世界に浸って、わたくしの琉球への視点は定まっていたのです。



『果園文庫蔵書目録』昭和十二年刊版】

大学の坂巻駿三が一括購入し、天理図書館が購入したものについては『フランク・ホーレー氏蒐収和紙関係文献目録』（四百二十二件）があります。まとめて購入されたもの以外の蔵書について、『ホーレー文庫蔵書展観入札目録』（七百二十件）が作られました。一般に売立て目録には、貴重本・稀覯本が目玉として列記されます。雑本と見なされたものは処分され、本人が作った記録や収書の事情を伝える書簡などは廃棄されるのが普通でしょう。ハワイ大学の宝玲文庫は特別でした。残された家族が琉球関係文献の散逸を惜しみ、一切をまとめて購入する事を条件としたのです。そのお蔭で、旧宝玲文庫の一部がそのままの形で残されることになったのです。

最近では蔵書の寄贈を申し出ても、あまり歓迎されません。貴重書は別ですが、明治期以後の普及本や雑誌類は一般書として扱われ、重複するものは辞退され、あるいは処分の可能性を告げられます。受け入れのためには「書誌情報」の作成が必ずで、人件費も掛かります。そのため「持参金」を添えて御願いをすることもあります。図書館の使命は、限られた収蔵場所を有効に使い、利用者に効率よく提供することです。よほどの著名人が収集した書物か特色ある文庫以外は、ほとんどの書物と書物が寄り添って並べられていた蔵書の姿は残りません。所蔵者の手を離れてしまうと、その全貌を知ることが難しくなります。

電子蔵書管理が進み、世界中がつながっている今だからこそ、可能性が出てきたと思えることがあります。書誌情報の一部に、旧蔵者の情報を加えることで、分散された蔵書が *map* 上で再構築できるかもしれないということです。欲張れば、蔵書印、表紙の画像、蔵書の来歴なども含めることが望ましいでしょう。無論それには、書誌情報を利用するための基準を共有することが前提となります。と、わたくしは夢のようなことを考えております。

#### 【お知らせ】

平成十二年に生活文化講演会でお話頂いた、張競明治大学教授の著書『海を越える日本文学』（ちくまプリマー新書・筑摩書房）が刊行されました。ご紹介いたします。「翻訳」された文学が、外国で受け入れられるための文化的背景や翻訳事情が記されており、興味深い内容です。

平成二十二年九月二十一日にワシントンの米国会図書館で記念展覧会が開かれました。同時に開催されたシンポジウム「日本コレクション：過去・現在・未来」では、八十年前に議会図書館の職に就いた坂西志保の業績について、横山學が講演いたしました。この内容は、議会図書館の <http://www.loc.gov/tr/asian/j-display/> においてビデオが公開されています。

『生活文化研究所年報』既刊目次と「生文研」(本文)は本学の Web で、ご覧になれます。(Y)